様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 29 日現在

機関番号：14401
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：22520242
研究課題名（和文）　19・20 世紀の英国小説におけるアジア表象の変遷

研究課題名（英文）　Changing Images of Asia in the Nineteenth- and Twentieth-century English Novels

研究代表者
伊勢　芳夫（ISE YOSHIO）
大阪大学・大学院言語文化研究科・教授
研究者番号：80223048

研究成果の概要（和文）：19世紀における欧米の植民地政策が今日の世界システムの構築に少なからず寄与したことを、英領インドにおけるインド及び周辺地域への言語・文化政策を調査検証することでもって実証し、また、たとえ植民地化されなくても欧米の文化を受容することによって不可避的に世界システムに包摂されていったことを、日本の近代化を調査することによって明らかにした。その研究成果を平成25年3月1日に出版刊行（本文550ページ）するとともに、国内外の主要図書館に寄贈し、広く研究成果を公表した。

研究成果の概要（英文）：By surveying British Empire's policies towards languages and cultures in India and its surrounding areas, I revealed that the Western colonial policies contributed to the building of the present World System to no small extent; at the same time, independent non-Western countries like Japan were forced to be integrated into such a World System.　I published the research results on March 1st, and sent copies of the book to some major libraries in Japan and overseas.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：オリエンタリズム研究、インドの近代化、日本の近代化、近代化言説形成＝編成

１．研究開始当初の背景

今日のグローバリゼーションの端緒は、「大英帝国」と呼ばれたイギリスのインドをはじめとする領土拡張の時期に、商業・貿易圏の拡張、軍事的影響力の拡大、植民地経営の強化に伴い、世界の広範囲にわたって地理・生態系・言語・民族学的調査を行い、非西欧地域の社会や風俗を知識化し、英語化し、そしてそれらの情報を世界中に流通させたことにあると考えられる。そしてそれに平行して、植民地を中心にイギリスの諸制度を移植することにより、非西欧地域の近代化に多大な影響を与え、今日の世界システムの礎を作ったといっても過言ではないであろう。そのような流れは、イギリスの世界的な影響力が低下した後も、同じ英語を母語とするアメリカ合衆国によって引き継がれることによりますます強化されていったのである。

近代化についてのこれまでの研究においては、楽天的な社会進化論的な考察か、あるいは、西欧のアジア・アフリカに対する暴力的な関係を糾弾するような一面的な研究がほとんどであった。したがって、「近代化」を多層的な現象として分析されているとはいえないと考えられる。

２．研究の目的

本研究の目的は、19 世紀における欧米の植民地政策が今日の世界システムの構築に少なからず寄与したことを検証するとともに、日本のように、たとえ植民地化されなくても欧米の文化を受容することによって不可避的に世界システムに包摂されていったことを明らかにすることである。そのため、そのような世界システム構築の中心的国家であったイギリスが、植民地政策や商業活動の前提としてインド以東の東アジアを知識化し、表象化していったプロセスを、植民地を舞台にしたイギリス小説や旅行記を使って分析する。したがって、本研究は従来の英文学研究の枠を超え、学際的な研究へと英文学研究を引き上げるものになると確信する。

３．研究の方法

本研究は、科学研究費補助金（基盤研究（C））のもとでの平成 19 年度から 21 年度の研究を継続して行い、さらなる発展を図り、そしてその成果を著書として発表することを目的とするのであり、そのため、まず、インド在住のイギリス人作家の小説、および日本を舞台にした小説についてのより精密な調査をイギリスの大英図書館で継続して行った。次に、バングラデシュのイスラム大学・人文社会科学部のマド・マムヌール・ラハマン教授と本研究に関する情報交換を行うことで、インド以東の地域への「西洋」の影響を複眼的に調査した。平成 22 年 3 月に博士学位を取得した論文にたいして、上記の 2 点を踏まえて研究を補完することによって、より完全な形に書き直した。それを平成 25 年 3 月に著書として出版した。

４．研究成果

本研究は、最重要概念として「近代化言説形成＝編成」を用い、19 世紀を中心に、18 世紀から 20 世紀における近代化されていくイギリス、インド、そして、日本の歴史の再現を試みたのである。その際一番心がけたことは、歴史資料の解釈・評価への特定のイデオロギーや価値観の感染をできる限り阻止することであった。ただし、さまざまな利害関係やイデオロギーや価値観にまみれた個人としての研究者が、いわば神のような透明な目で歴史資料を眺めることは現実には不可能である。そこで本研究において採用した方法論は、何らかの色合いに染まった解釈・評価が形成されれば、それへの対抗言説への衝動――本研究では、そのような衝動をフリードリヒ・ニーチェの言葉を借り「権力への意志」と名づけた――によってその解釈・評価を脱構築するような新たな解釈・評価の形成を試みた。もちろん、一人の人間にあっては、湧き上がる「権力への意志」衝動もある特定の傾向をもつことは否めない。そこでできる限り幅広い歴史資料を使い、さまざまな「声」を掬い上げるとともに、バングラデシュ人のマムヌール・ラハマンに協力を依頼した。そのことによって、20 世紀イギリス人小説家フォード・マドックス・フォードの小説『グッド・ソルジャー』のダウエルの語りそのままに、複数の視点と価値が入れ替わり立ち替わり現われるような分析になったと思う。したがって、20 世紀のモダニズム小説の手法を取り入れた分析方法となった。さらに、研究対象の資料の中には、文学史で大きく取り上げられる大作家と泡沫的な作家、大思想家と無名のジャーナリストを併置して研究したことも、本研究に接する人々――なかんずく文学研究者――を当惑させであろう。しかしながら、本研究で繰返し言及するように、何人といえども主要な言説形成＝編成の規制から逃れることはできない。そのことは、19 世紀イギリスのスチュアート・ミル、明治の福沢諭吉、英領インドのマハトマ・ガンディーの著作と人生を考えてみれば明瞭であろう。ただし、100 年以上も高い評価が続いている文豪と泡沫作家が全く同じといっているのではない。同じ粘土という素材からでも、見る者に感動や衝撃を引き出す力に大きな差があり、その力が芸術的天才と凡庸を区別している。本研究では、支配的な言説形成＝編成を「素材」と考え、その「素材」からいかに加工を施して言説的「反抗者」を生み出すかどうかを問題にした。したがって、同じ「素材」を使うという点では大作家も泡沫作家も同じであるが、その「素材」から生まれてくるものには当然違いが生じることを検証した。もっともその言説的「反抗者」も、時代が変われば主流の言説形成＝編成の一部になる場合や、一方、主流の言説形成にのっかていたものが「反抗者」として扱われる場合も往々にしてあることが分かった。

上記のような方針をもとに、本研究において、英語言説によるアジア表象の検証・読替作業を、インドと日本の視点から行った。そして、同様の力点を置いて、日本語言説による「世界」――そのなかでも「東アジア」――表象を検証・読替する作業も行った。もちろん、英語言説によるアジア表象の検証・読替については、これまでポストコロニアル研究や文学において盛んに行われてきている。なぜなら、19 世紀や 20 世紀の帝国主義の時

代だけではなく、20 世紀後半以降も、西欧中心の言説は世界を覆い、非西欧の人間はそれへの抵抗として自らに押し付けられた表象を書き換えることが必要であったからである。しかし、いまや世界情勢はかなり変化しつつある。その最たるものが中国とインドの台頭であり、それとともに、イスラム勢力の影響力の大きさである。したがって、非西欧地域は抵抗としての西欧言説の書き換えにのみ終始するのではなく、それぞれの地域や国家は、自らの社会の言説形成＝編成に対して責任をもつ必要が生まれてきたのだ。自分たちの社会の歪んだ言説形成＝編成を放置しておけば、世界における身勝手な振る舞い、隣国との軍事衝突、テロの横行を招くであろう。それに関しては、非西欧で独立を維持するだけではなく、いち早く近代化を達成した「日本モデル」の研究は非常に重要だと思われる。これは何も本研究者が日本人ということではなく、日本の言説形成＝編成にみられるさまざまな「歪み」から非常に有益な教訓が得られると考えるからだ。

英語による「アジア」表象、そして「日本モデル」の研究の方法として、本研究では、3 方向、すなわち、イギリス、インド、そして日本の視点から、そして且つ、多層的な分析を試みた。実際には、その試みは必ずしも完全なものにならなかったことは自覚している。1 つには、本研究にはイギリス人が参加していないことが挙げられる。ただし、本研究者も研究協力者であるラハマンも専門が英文学であり、しかも、英語言説は世界に充満しているので、「イギリス人の声」はいたるところから聞こえてくる。しかしながら、本書においてはすべて非イギリス人の眼差しを通してみていることには変わりない。2 つ目は、筆者がインドの言葉を理解できないということと、ラハマンも 1 年半日本で研究を行ったものの、彼の日本語力は発展途上である。このように、イギリス、インド、そして日本の 3 つの視点から多層的に研究するという理想からは程遠いといわざるを得ないが、新しい試みを行ったという点では、十分に価値があると自負している。

次に、より具体的に研究成果を述べる。

18 世紀から 20 世紀にかけて、近代化言説形成＝編成、そして、新近代化言説形成＝編成が進行し、世界は大きく変容してきた。まず、西欧諸国において近代化言説形成＝編成が始まり、前近代化言説＝編成との熾烈な闘争の末、「近代化」の根底にある分析的（科学的）認識方法が西欧社会に浸透し、宗教、社会制度の改革を行っていった。そして、社会の文化空間の中核にある「価値の源泉」に強い影響を与え、世界認識や価値観を変容していったのだ。その勢いは西欧圏だけにとどまらず、分析的認識によって強化された社会・教育制度、軍事、経済、外交力を行使して、近代化言説形成＝編成を西欧圏の外にも押し広げることになった。つまり、近代帝国主義の始まりである。西欧近代帝国主義は、「文明の使者」のスローガンの下、「自由」と「民主主義」を世界に広めていく。ただし、その「自由」と「民主主義」は、白人優位と植民地主義イデオロギーの充満したものであった。

このような西欧近代化言説形成＝編成の渦に巻き込まれた非西欧圏は、ある地域では西欧人の植民者によって生活圏を乗っ取られ、あるいは、別の地域では植民地政策の下に置かれた。日本の場合は、西欧植民者に乗っ取られることも、また植民統治されることもなかったが、西欧近代化言説形成＝編成の影響下で、「オリエント」のなかの 1 国の位置に置かれることになった。このような西欧近代化言説形成＝編成の異なる影響のもとで、非西欧地域はさまざまな対応を示すことになる。

ムガール帝国の支配にあったインドは、実際は多言語・多文化社会の集合体であり近代国家という意味での「国家」は存在せず、フランスやイギリスの傭兵として戦うインド人も少なくないほどナショナリズムの意識が芽生えていなかった。したがって、少数のイギリス人によってインドを植民地支配することは可能であった。そのような状況の下、1857 年の「インドの大反乱」のような抵抗は起こったものの、インドにイギリス流の社会制度・教育制度が持ち込まれることになった。そして、インド人のエリート層に限られたとはいえ、T・B・マコーリーの「血と肌の色はインド人でありながら、趣味や意見や道徳や知性においてはイギリス人」へと教育（洗脳）する政策は着々と進行していったのだ。しかしながら、そのような政策によって生まれてきたインドの中産階層の間に、イギリス人の教える「自由」と「民主主義」が内包する矛盾に気づく者が出始め、インド人の中にナショナリズム、つまりイギリスを主体とする言説形成＝編成に対する「反抗者」が生まれていったのであった。

一方日本では、西欧近代化言説形成＝編成の下で、西欧を模倣することで「オリエント」の位置から抜け出す（脱亜入欧）政策を推進し、日清・日露の 2 度の戦争を経て、一応は西欧列強の仲間入りを果たしたように思われた。しかし日本の軍事的地位に対して、西欧の人種のマッピングにおいては日本の位置がほとんど変わらないことに日本人はフラストレーションを蓄積していく。そのフラストレーションは、国粋主義とアジア主義を生み出していく。それが長引く日中戦争と、米英の援蒋活動が触媒となって、国粋主義とアジア主義、そして、西欧に対する劣等感と

が協同して、西欧近代化言説形成＝編成の「反抗者」を生み出し、それが俄かに日本の文化空間の支配的言説形成＝編成となり、対米・対英戦争である太平洋（大東亜）戦争へとつながっていった。そしてマレー作戦からインパール作戦までの流れにおいて、イギリス人、日本人、そして、インド人がそれぞれの「正義」のために死闘を繰り広げたのであった。その結果は、日本と、日本軍に従ったインド国民軍(INA)は敗北するのであるが、イギリス自体も大英帝国の瓦解に直面することになった。結局のところ、唯一の勝者はアメリカであり、戦後はアメリカを中心とする新近代化言説形成＝編成が世界を覆い、イギリスと日本はそれに従順に従うことになる。

本研究では、このような世界の歴史の主要な動きに対して、近代化言説形成＝編成の「言説の質」そのものを変えようという「反抗者」を、ラドヤード・キプリング、ジョゼフ・コンラッド等イギリス人作家の著作の中に見出そうとした。本研究で扱った作家たちが彼らの実験的な創作の試みのなかで、いかに「異質なるもの」を単一のイデオロギーの支配する言説の中に取り込もうとしたかを、綿密なテクスト分析を用いて検証した。手法は異なるが、彼らに共通するのは、本来は一つのコード体系に支配されているテクストに風穴を開け、異質なるコード体系を持ち込むことであった。もっとも異質なるコードを持ち込まれたテクストは、一般の読者の読み（解読）を困難にさせるので、大量に出回る情報媒体に急激な変容をもたらすことはないのであるが、20 世紀以降徐々に浸透していると思われる。そしてその浸透こそが、「普通」の人々が異文化を許容できる下地を作るのだ。つまり、文化の多様性を尊重するためには、複数の視点から、多層的に世界を見る眼差しが必要なのである。そのことによってはじめて、「文化的他者」に対して寛容的になれるのだと思われる。

今後の課題としては、本研究の検証をより一層緻密にすることはもちろんであるが、本研究で扱わなかった日本の旧植民地――台湾、朝鮮半島、旧満州――での言説形成がどのように進行したかということと、第 2 次世界大戦後に東アジアを構成する国々でどのような言説形成＝編成が始まり、進行していったかの検証を行うことである。そのような検証を経ることで始めて、東アジアの今後についての予測が可能になると思われる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 2 件）

① 伊勢芳夫、「戦前・戦中・戦後の日本とインド・・・そしてキプリング」、 日本キプリング協会、2013.3.23、学習院大学

② 伊勢芳夫、「日本の近代化--芥川龍之介と川端康成を中心に」、 バングラデシュ・イスラム大学英文学科セミナー、2011.3.9、バングラデシュ・イスラム大学（招待講演）

〔図書〕（計 4 件）

① 伊勢芳夫、マド・マムヌール・ラハマン（研究協力・執筆）、渓水社、『「反抗者」の肖像――イギリス、インド、日本の近代化言説形成＝編成――』、（2013）、575 ページ

② 木村茂雄、伊勢芳夫、他 5 名、大阪大学大学院言語文化研究科、『ポストコロニアル・フォーメーションズ VII』、(2012)、p.19-p.29

③ 木村茂雄、伊勢芳夫、他 6 名、大阪大学大学院言語文化研究科、『ポストコロニアル・フォーメーションズ VI』、(2011)、p.17-p.27

④ 木村茂雄、伊勢芳夫、他 5 名、大阪大学大学院言語文化研究科、『ポストコロニアル・フォーメーションズ V』、(2010)、p.57-p.64

６．研究組織
(1)研究代表者
伊勢　芳夫（ISE　YOSHIO）
大阪大学・大学院言語文化研究科・教授
研究者番号：80223048

(3)研究協力者
マド・マムヌール・ラハマン（Md. Mamunur Rahman）
イスラム大学・人文社会科学部・教授
(バングラデシュ)